

日常と自尊心がもたらす自立

テラ・ルネッサンスの活動

テラ・ルネッサンスはウガンダ北部で 2005 年から活動している日本の認定 NPO 法人である。これまでに 251 名の元子ども兵の社会復帰を促進してきたとのことであり、筆者が訪れたときは、第 11 期生の若者たちが、男性は家具作りを、女性は洋裁に使うミシンのメンテナンスを学んでいるところであった。



ミシンのメンテナンスを学ぶ女性たち

ウガンダ北部では 1980 年代後半から、反政府組織「神の抵抗軍（LRA：Lord's Resistance Army）」と政府軍が 20 年以上にわたって戦闘を繰り返した。内戦中、LRA は 3 万人以上もの子どもたちを誘拐し、強制的に従軍させたという。

2006 年の停戦後、北部ウガンダの治安は回復し、少しずつかつての生活を取り戻してきた。しかしながら、身体的、精神的に大きな傷を抱えていた元子ども兵の社会復帰は大変な困難があった。そこでテラ・ルネッサンスでは「3 年間で元子ども兵が社会復帰するために、必要な能力を身につけ経済的に自立すると共に、地域住民との関係を改善しながらコミュニティで安心して暮らせるようになる」という目標を掲げ社会復帰プロジェクトを開始した。洋裁や木工大工などの職業訓練に加え、受益者が安心して職業訓練に集中できるよう、生活支援をしたり、卒業後の独立に必要な基礎教育やマイクロクレジットにも取り組んでいる。また伝統儀式や文化（歌やダンス）を通じた平和教育や個別カウンセリングもしているとのことである。ただ案内をしてくださった鈴鹿氏によれば、トラウマを持つ彼らにとって「一番のカウンセリングは、皆で食事を囲むような何気ない日常なんです」との言葉が印象的であった。

また代表の小川氏がこれまでの活動の事業評価を取りまとめた際、「自立の達成度」と「自尊

心」に優位な相関関係が見られ、その「自尊心」は「家族・親族を含めた他者に対して何かしらの貢献を行っている」という理由が背景にあることがわかった。「自立」と「他者との繋がり」は一見反対のこのようで、実は強い相関があるという事実は、大変に興味深い話であった。

他方、これら「何気ない日常」や「自尊心」が元子ども兵の自立にもたらす影響は国際耕種が 2015 年から携わっている JICA 北部ウガンダ生計向上支援プロジェクトでも実感したことがある。プロジェクトの支援対象の農家グループには元子ども兵もいるが、あえて特定はしていない。しかしながらある時、一人の青年が研修最終日に「ひとこと言わせてほしい」と立ち上がった。そして自分が元子ども兵だったこと、そして「プロジェクトを通じて、皆で学び、野菜を作り、お金を稼げるようになったことで、ようやく自分に自信を持つことが出来た」と語った。この話を聞いたとき、心にトラウマを持つ人たちにとって、当たり前前の日常を過ごすこと、そして他者と協働することが如何に意味のあることなのかを知った。

現在、プロジェクトでは「元子ども兵」という言葉を使っていない。現地スタッフによれば「彼らもすでに社会の一員として過ごしているので、今更特定しなくてもいい」というのである。ところがテラ・ルネッサンスによれば、LRA は解体されたわけではなく、現在でも年間 10 人程度の帰還兵がいるとのことである。地域が平和になり、皆が忌まわしい記憶を思い出さなくなったのは良いことであろう。一方で、勝手に「内戦は過去のこと」にしていた筆者は自らの浅慮を恥じた。そして 17 年にもわたり、彼らを支援し続けているテラ・ルネッサンスの活動に改めて感銘を受けた。今後ともテラ・ルネッサンスとは、良き隣人として、共に北部ウガンダの人々の安心と平和のために仕事をしていきたいと思っている。